

富山大学人文学部令和6年度卒業論文

認知症当事者の「したい」を見いだす居場所
——認知症カフェの事例研究——

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
氏名 山田麻樹

目次

第1章 問題関心	1
第2章 先行研究	2
第1節 「ある」ことのできる居場所づくり	2
第2節 「思い」の聴き取りの意義	3
第3章 調査概要	4
第4章 つむぐ会の認知症カフェ	6
第1節 つむぐ会とは	6
第2節 応援団とは	6
第3節 認知症当事者	7
第4節 普段の認知症カフェの流れや様子	8
第1項 Fusion21で行ったカフェ	8
第2項 あるかふえでボッチャをしたカフェ	9
第5節 つむぐ会の特徴	9
第1項 フラットな関係性	9
第2項 当事者の「したい」の声を拾う	10
第3項 一人の声をみんなで行う	11
第4項 多様な出会いと社会とのつながり	11
第6節 家族が当事者の思いに気づく	11
第7節 「山に登りたい」の事例	12
第5章 つむぐ会は私の場所	14
第1節 認知症と診断されるまで	14
第2節 認知症の夫との苦労	14
第3節 私の場所	15
第4節 カフェで出会った仲間	16
第6章 つむぐ会は妻の笑顔が見られる場所	17
第1節 認知症と診断されるまで	17
第2節 つむぐ会に繋がるまでの苦労	17
第1項 診断直後の戸惑い	17
第2項 居場所を模索する	18
第3項 つむぐ会との出会い	19
第3節 つむぐ会のカフェ	19
第4節 「山に登りたい」への参加	20
第5節 他の家族からの助言	20
第7章 考察	21

第1節 「ある」ことのできる居場所	21
第2節 「思い」を聴き取る	22
第3節 「する」と「したい」こと	22
第4節 結論	23
参考文献	25
参考資料 URL	25

第 1 章 問題関心

認知症とは、さまざまな脳の病気により、脳の神経細胞の働きが徐々に低下し、認知機能（記憶、判断力など）が低下して、社会生活に支障をきたした状態のことを指す。日本では高齢化の進展に伴い、認知症人口が増加している。内閣府の「平成 28 年度版高齢社会白書」によると、2012 年の認知症患者数は 462 万人で、65 歳以上の高齢者の 7 人に 1 人に相当する。2025 年には約 700 万人にまで増加し、高齢者の 5 人に 1 人になると見込まれている（内閣府、2016）。また認知症が 65 歳未満で発症した場合、若年性認知症とされる。厚生労働省の「令和 2 年度若年性認知症実態調査」によると、患者数は全国に 3.57 万人と推計されており、人口 10 万人あたりの有病率は 50.9 人となっている。平成 21 年度の調査と比較すると、当該年齢人口の減少により有病者数は減少しているが、有病率は増加している。年齢階層別にみると、60 歳～64 歳で有病率は 274.9 人で一番多く、55 歳～59 歳は 110.3 人、50 歳～54 歳は 43.2 人となっている（厚生労働省、2009）。

このような背景の中で、地域社会における支援の一環として全国に設置されているのが認知症カフェである。認知症カフェとは、認知症の当事者やその家族が気軽に立ち寄り、地域の人々や専門家と交流することができる場である。オランダで始まったアルツハイマーカフェを源流として世界各国に様々な形で広がった。日本では 2012 年、「認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）」にて初めて明記された。そして 2015 年、厚生労働省とその関係省庁との共同で策定された「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」にて全市町村における認知症カフェの設置が目標とされた。認知症カフェの運営主体は、市町村のほか、地域包括支援センター、医療機関、NPO 法人、住民主体の会など様々であり、2022 年時点で 8,182 のカフェが日本で運営されている（厚生労働省、2022）。本研究では、認知症カフェが地域においてなぜ必要とされているのかについて、金沢市で若年性認知症カフェを運営する「若年性認知症の人と家族と寄り添いつむぐ会」の事例から考察する。

第2章 先行研究

第1節 「ある」ことのできる居場所づくり

井口（2020: 119-136）は、軽度・中度の認知症の人が通うデイサービスの天神オアシスクラブ(以下オアシスクラブ)の事例を取り上げている。オアシスクラブは当事者に「よりそう」ことを理念としており、在宅で生活する当事者にとって家族外での居場所となるデイサービスとなっている。ここでは一般的にスタッフにとって時間と労力のかかる入浴はなく、体操や歌、陶芸や絵画などのプログラムが行われながら利用者とスタッフが会話をし、過ごす。そのためスタッフの仕事はコミュニケーションを中心としたものに特化しており、スタッフたちは職種に関わらず交代でプログラムの進行を担当し、利用者のかたわらに座って話をする。当事者がトイレや外に出ようとするときにはさりげなくサポートをする。つまり、利用者に対してサービス内容と対応していて分かりやすいニーズを専門職側の定型的行為で満たしていくというよりは、一対一の会話やそこに集まった人びとで行う一日の活動の運営、その場の雰囲気づくりなどの仕事を中心となっているという。そのため利用者は一日の時間を明確な目的無く過ごすことになる。

井口は以上のようなオアシスクラブの実践の理念的な方向性は、認知症の人が「ある」ことのできる居場所づくりだと述べている。しかし実はそこでのケア実践は「する」ことのできる場所を意図的につくろうとするものであるという。一見逆方向に見える実践になる理由について以下のように述べている。

認知症の当事者や家族にとって認知症の経験はそれまでの姿から変容し「できなくなる」経験である。そのため当事者や家族は、それまでの姿から離れていく中で「できない」存在であることを徐々に痛感していく。そのような状況で「ある」ことを認める価値観へと一足飛びに移ることは困難だという。オアシスクラブでの支援は、当事者や家族がそうした変容プロセスの中にいることを前提にその人らしさによりそうものになる。そのため当事者や家族が「する」という意味合いが持てるようなはたらきかけをしたり、場をつくろうとしたりと試みるのだという。

井口はオアシスクラブに通う若年性認知症当事者の男性を例として挙げている。男性はオアシスクラブの中で自分より年齢の高い会員たちのための椅子の準備と片付けや昼食後の食器の片づけの役割を担っている。男性は毎月の終わりにスタッフから給料が手渡される。これは男性の家族があらかじめ月末に当事者に渡すようにスタッフに預けておいたお金である。このようにオアシスクラブのスタッフたちは「仕事に通っている」という認識を男性が持ち続けられるようにしていたという。

またオアシスクラブはデイサービス全体が「社会の中にある」というイメージを惹起し保てるような工夫をしているという。市の中心部のランドマーク的なビルにあること自体がカルチャーセンターに通うかのような印象をつくっている。社会に対してそうした印象を示

す場所に通い、講師の元で実際に作品をつくることで、サークル活動に参加しているかのような感覚を持てる場所になっている。こうした工夫で「それまでの姿」を本来のものと捉えている人たちにデイサービスに出てきやすくしているという。

このようにオアシスクラブではそれまでの当事者の姿を踏まえた上で場をつくりケアを行うことで、その場所に「ある」ことを可能にしている。

第2節 「思い」の聴き取りの意義

井口（2020: 150-161）はオアシスクラブにおける思いの聴き取りの事例を取り上げている。オアシスクラブではデイサービスでの活動が行われている場面から離れて、スタッフと認知症の当事者とが一对一で面談する空間をつくり、そこでゆるやかな質問に答えながら本人が語る形式をとっていた。その語りは録音され、さらに場合によってはその録音をスタッフが書き起こし、何回かそれをくり返して内容をまとめる形で当事者の「思い」が文字化されていく。そして内容が、たとえば講演の場で当事者が「思い」を語るような形で社会に発信されていくという。このような取り組みは、当事者が「思い」を言語として語ること、その語られる「思い」を知ることによって焦点を当てた試みであったと述べている。

このように「思い」を語ることの意義として、まず「本人の心を解放すること」があるという。当事者の心に直接働きかけ、「涙を流すこと」やそれを通じて「笑えるようになったこと」などその場面での感情表出が目指されるという。

しかしそれだけでなく、当事者から生まれてくる言葉の内容からその人がかかえる現在の問題を把握し、その直近の問題に対してなんらかの示唆を得ることに大きな意義があるという。当事者に対する周囲のケアのあり方を変えるための重要な情報を得ることを目的としているのである。そしてそれが特に家族にインパクトを与えるものになるという。すなわち、当事者の「思い」とは認知症の人の生活の多くを占める家族関係へとはたらきかけるための重要な情報という意味を持っているという。

このように当事者の「思い」が重要な情報とされる理由について井口は以下のように述べている。認知症の人をとりまく日常の世界、デイサービスに来る利用者の多くにとって家族において、その「思い」はなかなか現れにくいのだという。家族の中で当事者は「思い」を語ることが難しく、他方で家族は「思い」を聴くことが難しくなっていく状況がある。そのような状況に陥る原因は家族により様々であるが、多くの家族における二者関係である「被介護者」と「介護者」という関係の中では「思い」が現れにくいという点には共通性があるという。このような状況で当事者の「思い」を外部において見つけ、家族に示していく「媒介」の役割を果たすことに、聴き取りの大きな意義があるという。

第3章 調査概要

本研究では若年性認知症の人と家族と寄り添いつむぐ会（以下つむぐ会）が行う認知症カフェを調査対象とした。認知症カフェの運営メンバー、参加者へのインタビューと、認知症カフェに実際に参加しフィールドワークを行った。以下は詳細である。

調査1回目(インタビュー)

日時：2023年6月8日 10時30分から12時

インタビュー手段：Webex（オンライン会議ツール）

インタビュイー：道岸奈緒美さん(ソーシャルワーカー)、小堺武士さん(理学療法士)

調査2回目(フィールドワーク)

日時：2023年7月8日 13時40分から15時50分

場所：あるかふえ

活動内容：ポッチャ

調査3回目(フィールドワーク)

日時：2024年8月10日 10時から11時30分

場所：金沢21世紀美術館内のカフェ Fusion21

調査4回目（フィールドワークとインタビュー）

日時：2024年10月20日 10時から15時

場所：あるかふえ、金沢ゴーゴーカレースタジアム

インタビュイー：道岸奈緒美さん

調査5回目(フィールドワーク)

日時：2024年11月8日 18時30分から20時

場所：石川県立図書館

調査6回目(フィールドワーク)

日時：2024年11月9日 10時から11時30分

場所：あるかふえ

調査7回目(インタビュー)

日時：2024年11月26日 13時から14時

場所：金沢フォーラス6階 スターバックスコーヒー

インタビュー：A さん(認知症カフェ参加者)

調査 8 回目(インタビュー)

日時：2024 年 11 月 29 日 14 時から 16 時

場所：金沢フォーラス 1 階 スターバックスコーヒー

インタビュー：B さん(認知症カフェ参加者)

A さんと B さんの基本情報は以下の通りである。

【A さん】

- ・女性
- ・夫が若年性認知症当事者
- ・現在 67 歳、夫も 67 歳
- ・つむぐ会には 4～5 年前から通っている
- ・つむぐ会に夫は連れて行かず一人で参加している
- ・夫は就労継続 B 型事業所に月曜日から金曜日の週 5 日通う
- ・夫はショートステイに月に一日通う

【B さん】

- ・男性
- ・妻が若年性認知症当事者
- ・現在 74 歳、妻は他界している
- ・つむぐ会には 7 年前から通っている
- ・つむぐ会には夫婦一緒に参加していた
- ・つむぐ会以外の認知症カフェにも複数通っている

第4章 つむぐ会の認知症カフェ

第1節 つむぐ会とは

つむぐ会は、石川県金沢市、野々市市、白山市を対象に、精神科の医師、看護師、専門職、当事者家族などの所属団体や職域を超えたメンバーによって2015年に立ち上げられた。現在、月に一度、若年性認知症カフェ「みんなのたまり場 Haunt」を開催している。つむぐ会は金沢市の事業として運営されており、市からの委託を受けて活動している。そのため財源は基本的に市からの委託費である。

運営メンバーは主にソーシャルワーカーの道岸さん、理学療法士の小堺さん、岡部診療所の精神科の医師1名、精神保健福祉士1名である。岡部診療所のメンバーは、休日も仕事があるため、休日開催の認知症カフェの参加が難しい。そのため現地に居ることが多いのは道岸さんと小堺さんである。定期的にオンライン会議を行い、連携をはかっている。また、上記のメンバー以外にも運営に携わるメンバーは複数いる。

第2節 応援団とは

つむぐ会は金沢市若年性認知症応援団（以下応援団）というプロジェクトを行っている。認知症カフェの中では当事者から「あれやりたいこれやりたい」や「あんなことがあったらいいのに」という声があがるが、運営メンバーのみでは叶えられなかったり、本業の忙しさから日中付き添って一緒に行くことが難しかったりする。そこで地域の企業や団体の力を借りることで当事者の「したい」の声を叶えていく。このように一見現実的には難しそうに思われることを実現していくのがこのプロジェクトの醍醐味である。

当事者の声を実現するため、各自でできることを応援している地域の企業や団体を応援団と呼ぶ。そして企業や団体の強みと当事者のニーズのマッチングを行うのがつむぐ会の役割である。

また、応援団をプロジェクトとして始めたのは既にサポートを行っているが、なかなか姿の見えない地域の企業や団体に焦点を当てて見えるようにしたいという思いもあった。そのためサポートに応援団と名前をつけ見える形にすることで、認知症の人のためになにかしたい、または社会のためになにかをしたいと考えている企業・団体や一般市民に対して、その方法の一つとして指標を示したかったという。そして新たに応援団となる企業・団体を増やすことを目指している。

現在の応援団の企業や団体は以下の通りである。

- ・ 香林寺
- ・ 金沢21世紀美術館
- ・ v-cube

- ・ otokoto
- ・ そらまめ将棋クラブ
- ・ メープルハウス Fusion21
- ・ 小松市認知症ケアコミュニティマイスターの会

地域の企業や団体がサポートを始めるきっかけは、運営メンバーのネットワークであることが多い。運営メンバーは、当事者側と企業・団体側とのマッチングをイメージした上で、個人的なネットワークから声をかけている。

当事者の「したい」の声は様々である。例えば、「みんなで歌いたい」、「遠くの当事者と繋がりたい」、「山に登りたい」などがある。

第3節 認知症当事者

つむぐ会は、若年性認知症と診断された直後の人の参加をねらいとしている。診断直後の当事者達の困難について以下のように道岸さんは語る。

道岸：私たちの最初の仮説なんだけど、ある程度認知症が進行して、それに伴って身体介護などが必要になると介護保険に繋がる。けれどそれになるまでの人たちってというのが、まったく繋がる場所がないっていうのが社会の今の状況だと思う。そこに繋がれる一つの支援に私たちがなればよいよねっていうところで始まったかな。

社会的支援に繋がる場所がない当事者にとっての支援としてつむぐ会のカフェが始まったことがうかがえる。

一方で現在活動に参加する当事者の人には介護保険や職場などで社会支援に繋がっている人も多く存在する。道岸さんはそのような人達にもつむぐ会のような繋がれる場所が必要だと語る。

道岸：今来ている当事者の人には、もう介護保険使ってデイサービス行ったり、障害者手帳とって、就労Bっていったりとかそう人たちもいらっしゃる、要するに社会支援に繋がっている人もいらっしゃるけど、だからと言って卒業ですよっていう話じゃない。なんか、入っているいろんなコミュニティに繋がっていて、私たちでもこう職場の人ともつながってるけど、じゃあ仕事してれば友達いらんのかって、そんな話じゃないじゃないですか。仕事の人と毎日話してたら、じゃあ、プライベートな友達いらんのかって、そうでもないし。例えば職場の人に言わないことをプライベートな友達に言ったりするわけだから、それと一緒に介護保険でいくらデイに繋がってたり、働くことに繋がってたりしても、本人が望む仲間と出会えたら良いよね、っていう。認知症のことで悩

んだり認知症を気にしたりせず、やりたいことを一緒に楽しめる仲間と出会えたら良いよね。

社会支援に繋がったとしてもつむぐ会から「卒業」する必要はない。認知症のことを気にせず、やりたいことができる仲間と繋がっていただけるコミュニティがつむぐ会だという。

実際には、診断直後の当事者が参加することは、まだ少ない。参加者の年代は50代から60代が多い。認知症関連の病院にチラシを置くなど、つむぐ会を周知してもらう活動を行っている。また、運営メンバーである岡部診療所の医師がつむぐ会を紹介している。ただし医師から紹介されて参加しているのは2、3人で、チラシ等を見て自分から連絡を取り参加している人の方が多い。他にはソーシャルワーカー、介護士、ケアマネージャー、地域包括支援センター、ウェブページ、フェイスブックから連絡や、認知症の人と家族の会の石川県支部からの紹介などのきっかけもあるという。

第4節 普段の認知症カフェの流れや様子

カフェの活動内容は各回で異なっている。テーマを決めずに各々が雑談や相談をする時あれば、ボッチャ、歌、サッカー観戦などの企画を行う時もある。カフェの参加者の多くは認知症当事者とその家族である。片方が認知症当事者の夫婦が一緒に参加する場合や、当事者は参加せず家族だけが参加する場合が多い。しかしそれだけでなく当事者の娘が当事者の孫を連れて参加する場合もあった。会員制や出欠は取っておらず、チラシや紹介で道岸さんと繋がった人であれば、誰でも参加できる。そのためメンバーは毎回異なり、それぞれが開催場所や日時などから、参加しやすいものを選び参加している。具体的な例として、Fusion21で行ったカフェと、あるかふえでボッチャを企画として行ったカフェについて以下に記述する。

第1項 Fusion21で行ったカフェ

Fusion21というカフェは金沢21世紀美術館内にある。Fusion21は応援団であり、認知症カフェの場を提供する形で応援している。そのためカフェ内の2～3個のテーブルは認知症カフェのために確保されていた。

参加者は10人程度であった。集合時間は設定されているものの、15分前に到着する人もいれば15分後に来る人もいたため、参加者が徐々に集まる形となっていた。特に開始の合図はなく、集まった人たちで自然に会話が始まり、運営メンバーも参加者に混じって会話に加わり話していた。人数が4～5人に増えると、一つのグループで話し続けるのが難しくなるため、運営メンバーの道岸さんや小堺さんが声をかけてグループ分けを行った。基本的には当事者と家族を分ける形をとるが、夫婦で一緒にいた方が安心できるという参加者もあり、その場合は当事者と家族が混ざったグループになった。

会話の内容は基本的に雑談が中心だが、当事者と家族で違いがみられた。当事者は口数が少ない人が多く、他の参加者が積極的に声をかけて会話を進めることが多い。例えば、当事者が飲んでいるスイカジュースを見て「美味しそうですね。スイカ好きなんですか？」といった問いかけをする場面があった。当事者はこうした問いかけに対して、頷いたり笑顔を見せたりすることが多かった。一方、家族同士では自身や当事者についての近況報告をしあうことが多かった。また、当事者が現在通っているデイサービスの特徴や良い点など、認知症に関する情報交換が行われることも多かった。

終了時にも特別な挨拶や締め合いはなく、終了時間を過ぎると参加者はそれぞれ自由に帰っていった。

第2項 あるかふえでボッチャをしたカフェ

あるかふえは運営メンバーの医師の病院の裏手にあるカフェである。Fusion21で行ったカフェと同様に参加者は徐々に集まっていった。

ボッチャを行うには、椅子を脇に寄せ、床にテープを貼って簡易的なコートを作る準備が必要であった。この準備は運営メンバーだけで行うのではなく、その場にいる人の中で手の空いている人が行う。

ボッチャは1チーム3人で構成され、2チームが対戦する形式で進行した。運営メンバーが「やってみたい人！」と声をかけると、数人が前に出てきた。そのメンバーで最初のチームを作り試合を始めた。試合ごとにチームメンバーを入れ替えながら進めていった。試合の参加者は認知症当事者に限らず、その家族や運営メンバーなど、その場にいる全員であった。中には、当事者の家族である3歳ほどの子供がボールを投げ、試合に参加する姿も見られた。

一部屋の中に試合を行う空間と、それ以外の参加者が談話を楽しむ空間があり、チームメンバーの交代ごとに人々がその空間を行き来していた。試合の雰囲気は終始和やかであった。例えば女性3人のチームが自分たちを「昭和チーム」と名付けたり、「腰痛で投げづらい」と言って笑い合ったりする様子が見られた。

第5節 つむぐ会の特徴

第1項 フラットな関係性

つむぐ会の認知症カフェの活動は、その場にいる全員で行い楽しむ。例えば、ボッチャを行う際には、その場にいる全員で試合を楽しむ。準備や片付けも運営メンバーのみがやるのではなく手の空いている人が行う。このように、支援する側と支援される側という役割がなく、全員が対等な立場で活動している。そのため、運営メンバーと参加者の区別がつかないこともある。

道岸さんは、このようなカフェでの関係性について仕事というよりプライベートに近いイメージであり、仲間や友達の感覚だと語っている。

また、道岸さんは家族から困りごとの相談を受けた際、個別フォローとして電話で詳しく話を聞くことがある。例えば、「最近怒りっぽくて、家を急に出て行ったりして困っている」という相談を受けた時には、「どういう場面で多い？」と家族に問いかける。ケアマネジャーの方は「デイサービスにつなげましょう」と具体的なプランを提案することが多いが、道岸さんはつむぐ会の仲間としてフラットな関係性を大切に、家族と一緒に原因を考えることを重視している。当事者がどんな思いでその行動を起こしているかを一緒に振り返るのである。そうすることで目先の行動に目が行きがちな家族に当事者の本当の思いを考えることに繋がることもあるという。

第2項 当事者の「したい」の声を拾う

カフェの中やその前後で当事者が自発的に発した「したい」の声を拾っている。声を聞く側、聞かれる側という関係にはならないよう、自発的な声を大事にしているという。

小堺： 若年性認知症の方ってご夫婦とかでいつもべったり一緒にいるんで、なかなかやっぱ相方が代弁しすぎちゃうんですね。なのでカフェの時になるべくなんとなく本人と、ご家族を別の席に。全く別の部屋ってことじゃなくて、同じ空間なんだけどテーブル分けて座ってもらったりとかして。当事者だけのテーブルなんかで話していると割と、「いや、実はうちのには言えないけど、こんなんだ」とかって話が出てきたりとか。そういった工夫はしてる。あとは言葉が出にくい人もいて。そんな人には、なんとなく写真のカードみたいなもの見せたりとか。ちょっと話題の提供のきっかけになるような写真とか。本当にちょっとのことから話を広げてみたりとか。そういった工夫はしていた時期もあります。

このように、空間を分けたり、写真のカードを使ったりして工夫をし、当事者の声を拾っている。写真のカードを利用する時は、当事者の方にカードを指さしてもらい、話を広げることもあるという。また家族から相談があり、電話でフォローする際、家族から当事者へ電話を代わってもらい話を聞くこともある。電話について以下の語りがある。

道岸： 本人が例えば家でちょっと感情的な、怒りを出したりとかして家族が困っちゃうわけ。それで家族になんでそもそも怒り始めたの？って聞くと「よくわからない」って家族はなっちゃう。それはやっぱり家族って正直、家の中の閉塞した関係性だからお互いに混乱しちゃうから。そういう時に家族に電話本人に代わってって言って。それで代わってから「今なんかちょっとイライラされたってお話なさってるけど、何か腹立つこ

とあったの？」って聞いたり。別に怒るなどか言うわけじゃなくて(笑)。「何か面白くないことあったんですか」とか。そしたら「自分はこういうことしたいのにしようとしたら奥さんに否定された」とか言われるから。

道岸さんは家族間の閉塞した関係性において当事者と家族共に混乱してしまうことを指摘している。家族と当事者の間に入り話をするすることで、当事者の思いを引き出せることがあるという。

第3項 一人の声をみんなで行う

当事者の声は一人のみからの要望であっても拾う。そして一人の「したい」をその人のみではなく、みんなでやることを大事にしている。それが、みんなで何かを楽しむきっかけや、やりたい事を見つけるきっかけになることがあるのだという。実際、参加者達の中で、今まで知らなかった好きなことや、やってみたいと思うことに出会っている連鎖が起こることがよくある。例えば、とある活動でオカリナの演奏を聞いた当事者が「あの音良いね」とオカリナを買ってきて、既にオカリナを吹ける当事者にならって練習し、一か月後のカフェで披露した事があった。

第4項 多様な出会いと社会とのつながり

つむぐ会のカフェで行われるイベントは、応援団等の多様な人々との関わりを通じて企画される。医療福祉関係者だけが当事者と関わるのではなく、さまざまな職種や立場の人々、異なる趣味を持つ人々が集う。多様な人々が集うことで、互いの持っているネットワークの話やアイデアが活発に交わされるという。その中で当事者たちも「これいいね」と言ったものを形にしていくという。

以上からつむぐ会は社会とのつながりを感じられる場と考えられる。このような環境は当事者や家族にとって良い刺激となる。また、当事者の「したい」を叶えやすい環境に繋がっている。

第6節 家族が当事者の思いに気づく

道岸さんは、家族が当事者について愚痴をこぼす場面がよくあると語る。「何回言ってもこんなだよ」とか「何もできない人なのよ」といった言葉が家族からよく聞かれる。一方で、つむぐ会の先輩家族たちは当事者が怒ったり黙ったりしても「実は思いがあるんじゃないの」とか「もっと本人が楽しいことを一緒に考えたら良いよ」と言うそう。先輩家族たちは、家族としてのしんどさを話しながらも、「本人にも思いや楽しむ権利がある」とも話す。かつては、当事者への不満や「怒って大変だからデイサービスに行かせたい」といった相談

が多かった家族も、今では「本人が好きなことを考え、それを活かせるデイサービスなら継続性があるよね」と話すようになったという。

例えば、怒って家を出た当事者の行動について「その前に夫婦でどんなやり取りがあったのか」道岸さんが聞くと原因となる出来事があるという。それが分かると家族が自ら「私が夫の言うことに耳を傾けず、こうやってしまったから怒って家を出たのね」と振り返るようになったという。

このように家族が、当事者の思いによりそう考え方になったのは、つむぐ会での交流や道岸さんとの対話を通じて、変化していった結果だと道岸さんは振り返っている。

道岸さんが強く家族に伝えてきたことは、認知症当事者には、まだ十分な力があり、他者と関わる社会性も持っているということだという。また、笑わない、怒る、落ち着かないといった行動の背景には、すべて何らかの思いがあることである。家族は当事者のできなくなっていくことに注目してしまいがちだが、つむぐ会の活動に参加することで当事者の新たな一面や表情を知ること、当事者の本当の力に気づいていくそう。

以上のことから、つむぐ会が家族の意識を大きく変える役割を果たしていることが分かる。最初は不満や愚痴ばかりを口にしていた家族が、対話や活動を通じて当事者の底力に気づく。そして当事者の思いによりそえるようになるのである。これにより当事者と家族との関係を良好にすることに繋がっていると考えられる。

第7節「山に登りたい」の事例

当事者の「したい」の声を拾いみんなで行った一例として「山に登りたい」の事例を取り上げる。

道岸：基本カフェでお会いしたらみんなお互いに「好きなことなに？」とか聞くから、山の事おっしゃった人は自ら、特にこっちが言葉を引き出したというよりは自ら「認知症になったら家族が一人で行っちゃだめっていうんだよね、もともと雪山も行ってたのに。」って山の話をして。「じゃあ一緒に行く？」っていうのはこっちが声かけ、提案はしたけど。そしたら「じゃあ行きたい」ってなって。

「山に登りたい」のイベントは、元々山登りが趣味である当事者の自発的な声きっかけであったという。山に登る計画を立て始めると、山までの交通手段が課題となった。その時、運営メンバーの一人に21世紀美術館に詳しい市の職員がおり、団体鑑賞用のアートバスの利用を提案した。アートバスは21世紀美術館を経由すれば他の場所を目的地にすることが出来る。そのため21世紀美術館に寄った後、山登りをすることとなった。21世紀美術館が応援団となったきっかけは、21世紀美術館内のカフェを行い、チラシを置いていたことで

あるという。そこで偶然 21 世紀美術館の副館長の方と知り合いになった。そのため 21 世紀美術館内の見学の際には館内を副館長の方が案内をすることになったという。

当日は 30 人ほど参加者が集まり、バスの席がいっぱいになった。当事者とその家族で参加する人や、家族のみで参加する人がいたようである。参加者が住んでいるエリアに駐車場のような場所を複数設定し、それぞれ集合時間を決めてピックアップしていった。

山登りではシャボン玉やオカリナを持ってきた人もおり、参加者それぞれが好きなように楽しんでいた。山登りの間、遭難や怪我をしないよう配慮は必要であった。認知症の方の中には空間認識能力が劣っている人もおり、斜面、段差が分かりづらいことや、一生懸命になって周りが見えなくなることがあるためである。

第5章 つむぐ会は私の場所

この章ではつむぐ会の認知症カフェに通う A さんについて述べる。

第1節 認知症と診断されるまで

A さんが夫を認知症だと感じ始めたのは、いくつかの出来事がきっかけだった。

A さんの夫が車の冬タイヤを預けた場所が分からなくなったことがあった。A さん夫婦は当時、車の冬タイヤを地元の車屋に預けていた。A さん自身はその場所を覚えていたが、あえて教えなかったという。夫自身に「自分がそういう風になっている」という自覚を持ってほしかったからだった。しかし A さんが病院に行った方が良いことを伝えても、夫には自覚がなく病院に行くことを拒んでいた。

さらに、現在住んでいるマンションを契約したときの出来事もきっかけとなった。A さんが「この日は契約の日だから休みを取ってほしい」と伝え、銀行や不動産会社での手続きについて説明していた。しかし前日に確認すると夫は「そんな話は聞いていない、もっと早く言えばいいのに」と言ったという。A さんはすでに伝えていたため困惑したという。

また、不動産の書類についてのやり取りもきっかけとなった。A さんが「不動産の書類を書いてほしい」と言った時、夫は「明日書く」と返事をした。しかし翌日になって書類を渡すと夫は「昨日の休みに言えばよかったのに、なぜ今日になって言うのか」と不満を述べた。ちょうどその場に A さんの娘が里帰り出産で帰省しており、夫に対して「お父さんが自分で「明日書く」と言ったのになんで？」と指摘する場面もあった。

このような出来事があったとしても A さんの夫はなかなか病院に行かなかったという。診断を受けるきっかけになったのは、夫の勤める会社の働きかけだった。会社から「この日に予約を取ってあるので病院に行ってほしい」と強く促されたことで、ようやく受診に至ったという。そこで若年性認知症と診断された。

第2節 認知症の夫との苦労

A さんが特に苦労したこととして語ったのは、夫が運転していた車とバイクを手放した経験だった。夫自身は車とバイクを手放しながらないが、他人を巻き込む事故につながる可能性があり危険だと A さんは感じていたため、早急に廃車手続きを進めることにしたという。A さんの娘の夫にも協力してもらい、バイクのナンバープレートを外し市役所に廃車手続きを依頼した。バイク自体は近くの業者に引き取ってもらい処分した。一方、車はリース契約だったため、リース会社に連絡をして廃車を依頼した。リース会社も事故のリスクを考えスムーズに手続きを進めてくれた。しかし年末であったため一定期間車を持っておく必要があった。病院の医師からは「車の鍵の管理を徹底してください」と助言され、鍵を夫の目に触

れない A さんの職場のロッカーに保管することにした。このような工夫を行い無事車とバイクを廃車にできたという。

以上のことから A さんは家族や医師と連携しつつ夫の認知症に適切に対処しようと努力したことがうかがえる。

第3節 私の場所

A さんの夫は診断を受け若年性認知症当事者となったが、つむぐ会のカフェに参加したことが無い。A さんは最初から一人でカフェに参加している。1 人で参加する理由について尋ねたところ、A さんはつむぐ会を「私の場所」だと考えているからだと答えた。A さんは誰かと行動するのが苦手で 1 人でいる方が好きであるという。夫をカフェに連れてくる場合、一度家に夫を送り届けてからでないと A さんは他の場所に出かけることが出来ない。そのようになると A さんは自由に行動できなくなり不便だという。

つむぐ会のカフェに通い続けている理由について尋ねると、つむぐ会の「ゆるい感じ」が居心地が良いという。「ゆるい感じ」とはどういう意味かについて以下の語りがあった。

A：そんなに質問してないこないじゃない？。「あんた、あなた、旦那さんとなんとか」とかそういうのあんまり聞いてこない。聞いてこないから相手がどういう人なのかわからないっていう人もいますけど。

山田：そうですね。

A：それは、少しずつ、わかっていけばいいことで。そんなに自己紹介とかしなくて。

山田：しないですよ。

A：最初はスタッフなのかな、どうなのかなってわからない。今でもそうですよ。

山田：結構皆さんも分かってないまま喋ってるんですか？

A：わかってない。全然わかってないよ。みんなわかってない。

山田：その感じが逆に気楽なんですかね。

A：そうなんですよね。うん。

この語りから、A さんはつむぐ会のカフェにおいて相手が自分のことを詳しく尋ねてこない点を心地よいと感じていることが分かる。自己紹介を求められず、またプライバシーに深く立ち入るような質問や詮索が少ないため、A さんにとって気楽に会話を楽しめる場となっていると考えられる。

第4節 カフェで出会った仲間

つむぐ会のカフェに参加して一番良かったことは、そこで出会った2人と仲良くなり、カフェ以外の場でも3人でお茶や食事を楽しむ仲間になれたことだという。仕事の話や他愛もない話ができる関係であり心地よいと感じている。

Aさんはその仲間のうちの1人と仲良くなった経緯について語った。きっかけはカフェでAさんがその友人の隣に座り、話をしたことだった。その友人は当時夫が認知症と診断されたばかりであり、精神的に非常に追い詰められた様子だったという。そのような状況の中で先にカフェに参加していたAさんと話すようになった。また、偶然家が近所であったため、近所のスーパーで待ち合わせをしてフードコートで話し、一緒に買い物をして帰る機会が増え更に仲良くなったそう。

以上の事からつむぐ会のカフェは親密な友人や仲間を作るきっかけとなる場として機能していることがうかがえる。

第6章 つむぐ会は妻の笑顔が見られる場所

この章ではつむぐ会の認知症カフェに通う B さんについて述べる。

第1節 認知症と診断されるまで

B さんは、妻が 2010 年の夏に認知症と診断されたが、その前から異変を感じていたと語る。その異変とは例えば、約束を突然キャンセルしたり、友人の集まりに行かなくなったりなどである。これらの原因を最初はどう病ではないかと考えていたという。B さんは振り返ると、その頃から妻自身が不安を感じていたのではないかと。その後も忘れっぽくなったり、人付き合いがうまくいかなかったりして、何かがおかしいと感じていたものの、うつ病ではないかと推測していた。しかしその後、物忘れが目立つようになり病院を受診したところ、1～2 か月の診断期間を経て認知症であることが判明したという。

第2節 つむぐ会に繋がるまでの苦労

第1項 診断直後の戸惑い

妻が認知症と診断された直後、B さんは何をどうすればよいのか、誰に相談したらよいのか分からない状態だった。妻は日常的にできなくなることが増えていった。例えば、何度も散歩に出かける、ご飯が十分にあるにも関わらずまたご飯を作ろうとするなどである。こういった状況であったため B さんはあと 3 年ほど働くつもりであった仕事を辞め、実家のある金沢市に引っ越し、妻と共にいることを決断したという。

その後 B さんはインターネットで情報を調べ始めた。インターネットには膨大な情報があるが、信頼性の低いものが多く、必要な情報を得るのに苦労したという。介護サービスについても様々な情報が出てくるが、自治体ごとに内容が異なるため、金沢市でどのようなサービスが利用できるのか具体的には分からなかった。金沢市のホームページには基本的な情報しか記載されておらず、実際に何ができるのかは掴みにくかったという。ネットの情報には限界を感じた B さんは、市役所の福祉課を訪れた。福祉課の担当者は福祉について詳しく説明してくれるものの、話が専門的すぎて理解するのが難しかった。最終的に具体的な相談は地域包括支援センターですよう案内されたが、「地域包括支援センター」とは何なのか全く分からない状態からのスタートだった。なぜ市役所で相談できないのか分からず地域包括支援センターへとたらい回しにされているような感覚を抱いたという。

地域包括支援センターでは、近くにあるデイサービスについて一覧表として知ることができた。しかし特定の施設を最優先することになるため、個別の施設を直接紹介してもらうことはできなかったという。B さんは一般的な介護施設ではなく、若年性認知症に特化した支援を行う施設を探っていた。だが、当時そのような施設はほとんど存在せず、地域包括支援セ

ンターでも具体的な情報を得ることはできなかった。また細かい相談をしたくても、横には妻が付き添っており、自身が認知症であると認めたくないという妻の気持ちを考慮すると、深い話をするのは難しかった。こういった状況で Bさんは途方に暮れるばかりだったという。

第2項 居場所を模索する

その後 Bさんは施設を見つけるため自ら動き始めた。しかし様々なデイサービスを見て探したが妻の居場所に適した場所を見つけられなかったという。多くのデイサービスは、主に足腰が弱くなり生活に支障をきたすようになった高齢者を対象にしていることが多かった。そのため、利用者の年齢層は妻よりも10歳から20歳も上の人々が中心だった。妻はまだそのような年齢ではないと感じていたため、そのような場所に通うことに抵抗感を抱いていたという。さらにデイサービスに来る多くの人は、身体は弱っているが頭はしっかりしているため会話は活発だった。一方で、Bさんの妻は身体が元気でも、会話がうまくできなかったり、環境に馴染めなかったりすることがあった。そのため、認知症に特化していない通常のデイサービスでは、利用者と妻との間に明らかなミスマッチが生じていた。妻自身は「ここで自分は何をするのか」と戸惑い、Bさんから見ても場違いな印象を受けることが多かったという。

また老人福祉センターも妻の居場所には適さなかったという。Bさんには老人福祉センターがすでに退職した高齢者が将棋や囲碁、手芸などの趣味やサークル活動を楽しむような場を感じられたという。Bさんの妻は見た目は元気で普通の主婦のように見えるものの、順序立てて物事を考えることが苦手であるため輪の中に入り役割を持って活動することが難しかった。また、他人と会話をすると時々とんちんかんな受け答えをしてしまうことがあり、上手くコミュニケーションが取れないことがある。そのため、妻自身はやる気を持って活動に参加しようとしても、周囲との関係が上手くいかないことが多く、老人福祉センターに通うことも辞めたそう。

当時認知症カフェが少しずつ増えてきてはいたが、それらの多くは予防を目的とした授業や体操が中心で、妻の居場所だとは感じられなかったという。結局、Bさんは妻と二人きりの生活を続けるしかなく、介護のほとんどを一对一で担う状況が続いた。

また、サービスを受ける際、「まずケアマネージャーを決めてください」と言われたが、Bさんにはケアマネージャーが何なのか詳しくは分からなかった。親が以前医療支援を受けていたためある程度は理解していたが、どこにいるのか、どのように探せばいいのか分からなかった。また、ケアマネージャーにも種類があり、どの人が適任なのか悩んだという。特に認知症に詳しい人をお願いしたいと思ったが、どうすればいいか分からなかった。

第3項 つむぐ会との出会い

Bさんが最初につむぐ会を知ったのは、近所の病院を訪れたときだった。最寄りの病院を受診した際、その病院の壁につむぐ会の若年性認知症カフェの活動を紹介するポスターが貼られていた。Bさんはそれを見て、「こんなことやっているんだ」と初めてつむぐ会を知った。その後ポスターに記載されていたソーシャルワーカーの道岸さんを訪ねて話を聞くことにした。実際に話を聞いてみると、道岸さんは「ぜひいらっしゃい」と温かく迎えてくれた。そういった経緯で診断から7年経った2017年、つむぐ会のカフェに参加することになった。この経験からBさんは「結局は、自分から求めて動かなければ、必要な支援には出会えないのだ」と強く感じたという。他の支援や情報についても、結局はこちらから探し求める努力が必要だったと振り返っている。

第3節 つむぐ会のカフェ

つむぐ会のカフェは当事者と家族をグループを分けて話すことが多い。ただBさんの妻は人と話すことがあまり得意ではなかったため、夫婦で一緒にグループに参加して会話をすることが多かったという。会話の内容は基本的には雑談と家族間での情報共有であった。つむぐ会に集まる人たちは認知症当事者やその家族であり、認知症のことについて深く理解していた。そのため、たとえ妻が変わった発言をしても拒絶されることはなく、周囲の人々は温かく接してくれた。そうした環境のおかげで、奥さんも安心して参加できたことが良かったとBさんは語る。

Bさんは思い出を忘れないようにたくさんの写真を撮る中で、なかなか妻の笑顔を見ることが出来なかった。他の場所ではなかなか見られなかった妻のニコニコした表情をつむぐ会では見られたことが非常に嬉しかったという。

つむぐ会で印象的な思い出について尋ねたところ以下のような語りがあった。

B：やっぱり美術館のカフェやな。あそこの環境がすごく明るくてね。開放的やろ。デイヘ行っても、こういう家族会のミーティングの場所行っても、部屋の中で閉鎖的な環境。美術館って結構ガラス張りで周りにいっぱい人がいるの見えるし。それと、お出かけで山行ったりね、お花見に行ったりとか、そういうのはこういうのを待ってたと、望んでみたいなことをやってくれた。自分でも連れていってるけど、所詮2人で動いてるわけや。いつも見慣れた顔がそばにいて手引いてるだけの話だね。でもつむぐ会へ行くとみんなが寄ってきて話をしたり、ワイワイっていうのが聞こえてくるから、すごく刺激になるやろな。認知症ってやっぱりいろんな社会的な繋がりを維持する方が悪くならないとかね。そんなところがあるという風に信じてる。お薬も大事けども、そういう閉じこもらないようにすることの方がもっと大事やな。そういうことを率先してやってくれてるのがすごく好きやったな。

Bさんは美術館でのカフェの開放的で明るい空間が魅力的に感じたという。また、イベントなどで様々な人と交流し、活気のある雰囲気を感じることに刺激になったという。開放的で明るく、社会とのつながりを感じられるつむぐ会の環境はBさんの理想であり待ち望んでいたものだったと語っている。そして認知症の症状の緩和においても、薬だけでなく環境も重要であると実感したという。

Bさんの妻はカフェで何か「したい」ことがあったのか尋ねたところ、元々の性格としてやりたいことを自分からやるタイプではないため、他の人がやりたいといったイベントに参加することで楽しんでいるという。

第4節 「山に登りたい」への参加

Bさん夫婦は「山に登りたい」のイベントに参加した。イベントでは妻は終始ニコニコしておりいい表情をしていたと語った。山登りの最中では、Bさんが一緒に居なくても他の人達が手を引いて過ごしていたそう。妻が他の人と交流し楽しそうにしていることがBさんにとっても嬉しいことだったことがうかがえる。山登りの途中では、当事者がオカリナを披露し、参加者全員で盛り上がる時間や、シャボン玉を使って遊ぶ時間が設けられていたという。

Bさんはこのイベントが誰かの「したい」で始まったこととは知らなかった。このことから、つむぐ会では個人の「したい」という声を拾い上げ、それを特定の誰かの提案として強調するのではなく、カフェの一つのイベントとして自然に企画していくことがうかがえる。

第5節 他の家族からの助言

Bさんはつむぐ会を含む認知症カフェでは、他の家族から情報収集をすることが多かった。「こんなことがあったけどどうする?」「そんなふうになっているけど、それでいいか?」と聞きながら、周囲の人にアドバイスを求めていたという。認知症や介護の知識を持っていなかったため、妻に対するサポートが正しいのか分からなかった。介護に便利な道具があることも知らなかった。

最も困ったのは妻が粗相をするようになり、下の世話をしなければならなくなった時だったという。特に女性特有の生理現象についてはまったく知識がなく、Bさんはカフェに参加している女性たちに相談することが多かった。「紙パンツを使えばいい」「ブラジャーは変えた方がいい」といった具体的な助言をもらいながら対処法を学んでいった。

ある時、妻が便をした紙パンツを取り換える際には、脱がせる際に足まで汚れてしまい、大変な思いをしたことがあった。その時、カフェで「困った、困った」と相談したところ、「紙パンツは横で破いて外せば汚れずに取れる」という回答をすぐに得られたという。このように、カフェでは多くの学びを得られたとBさんは語った。

第7章 考察

第1節 「ある」ことのできる居場所

井口（2020: 119-136）は、オアシスクラブが理念的には認知症当事者が「ある」ことのできる居場所を目指していると述べている。その「ある」ことのできる居場所づくりは、つむぐ会の認知症カフェの実践と共通する部分があると考ええる。

つむぐ会の認知症カフェは、スポーツや歌などの企画が行われる中で、参加者同士や運営メンバーが会話をすることが主な活動である。また、企画そのものが「集まって会話すること」である場合も多い。このように、会話を活動の中心としているところは、オアシスクラブと共通している。また、運営メンバーは参加者に混ざり一緒に企画や会話を楽しむことで、友達や仲間のようなフラットな関係性を築いている。参加者が話しやすい環境をつくるためグループ分けを行ったり、企画の軽い説明をしたりなどフォローを行うこともある。このように運営メンバーの仕事が専門的なニーズに向けたものではなく、活動の運営やその場の雰囲気づくりが中心となっている点もオアシスクラブと共通している。参加者全体における明確な目的がなく、楽しい時間を過ごすことに重点を置いているつむぐ会は、オアシスクラブと同様に「ある」ことのできる居場所となっていると考ええる。

実際に、当事者であるBさんの妻にとっても、つむぐ会は「ある」ことのできる居場所となっていたと考える。Bさんは妻のための身体的な介護や認知症予防の授業などの専門的な支援を求めていなかった。それよりもBさんの妻が笑顔になれる場所を求めていた。何かをすることを求められず、認知症に理解のある仲間と安心して過ごすことのできるつむぐ会は、Bさんの妻にとって「ある」ことのできる居場所であったのではないかと考える。

一方で、家族にとってもつむぐ会は「ある」ことのできる居場所になり得るのだろうか。例えば、Aさんは当事者の家族として1人でつむぐ会のカフェに参加している。

Aさんがカフェに参加して一番良かったと語るのは、仲間と出会えたことである。Aさんがつむぐ会において仲間と出会う意味を推察するために、つむぐ会に通う以外の場合についても考える。もしつむぐ会ではないサークル等に参加する場合、明確な目的が存在する場合が多く、何らかの活動を「する」ことが求められる。そのため参加のハードルが相対的に高いといえる。さらに周囲の人々が認知症について深く理解していない可能性が高い。そのため、認知症に関する誤解がストレスとなったり、周囲からの疑問や質問がうっとうしく感じたりする可能性もある。

一方でつむぐ会のカフェでは、活動の中で企画をすることはあるが、参加者全体における明確な目的はない。そして参加者の多くが認知症について理解がある。参加者達は認知症に関する苦労が分かっているからこそ、深く聞いてこなかったり、励ましたりする場面もあるだろう。「認知症の介護から一時的に解放され一人の時間を過ごしている」ということを知りながらそれを否定してこない、または肯定してくれる他者の存在があるのはつむぐ会であ

る。そのため A さんにとってつむぐ会は「ある」ことのできる居場所になっていたのではな
いかと推察する。このように家族にとってもつむぐ会は「ある」ことのできる居場所になり
得る。

第2節 「思い」を聴き取る

つむぐ会では、当事者の「思い」を重視している。第4章第6節で述べたように、つむぐ
会に参加する先輩家族は、「本人にも思いや楽しむ権利がある」と語っている。そして、第
4章第5節第2項で述べたように、「思い」を聞き取るため、家族から当事者へ電話を代わ
ってもらい直接話を聞くこともあるという。

井口（2020: 150-161）は、オアシスクラブでは一対一の面談形式で当事者の「思い」を
ききとる取り組みが行われていると述べている。このように、当事者の「思い」に耳を傾け
るという点でつむぐ会とオアシスクラブには共通点がある。

しかし、両者における「思い」という言葉の意味や文脈には違いが見られる。井口はオア
シスクラブの「思い」の聴き取りの意義の一つは、「本人の心を解放すること」であり、感
情表出が目指されると述べている。ここでの「思い」は、認知症当事者が抱える不安やつら
さといったネガティブな感情から、嬉しさや楽しさといったポジティブな感情まで、様々な
感情を包括的に含むものだと考える。また、井口は「思い」の聴き取りは当事者に対する周
囲のケアのあり方を変える情報を得ることを目的にしているとも述べている。ここでの「思
い」は当事者の状況をより正確に捉え、ケアを改善するための材料にするという意味がある
と考える。

一方、つむぐ会における「思い」は、当事者の行動の背景や理由という意味でよく用いら
れている。それは、つむぐ会では「怒る」や「黙る」といった当事者の行動の背景には、し
たいことや好きなことができないからであるという考え方があるからではないか。そのた
め、なぜそのような行動をしたのか、本当はどういったことがしたいのかということ「思
い」として表現しているのである。こういったことから、当事者の「したい」の声を拾い上
げることが、当事者の「思い」を理解し、できない状況を解決する上で重要となるのである。

第3節 「する」と「したい」こと

井口（2020: 119-136）は認知症の人が「ある」ことのできる居場所づくりのケア実践は、
「する」ことのできる場所も意図的につくろうとするものになり、一見逆方向に見える実践
になると述べている。そこで、オアシスクラブにおける「する」ことのできる場所をつくる
実践と、つむぐ会における「したい」ことを実現する実践を比較する。

井口はオアシスクラブの実践例として、若年性認知症当事者の男性への実践を挙げていた。
男性は自分より年齢の高い会員たちのための椅子の準備と片付けや昼食後の食器の片づけ
の役割を担っている。そして毎月の終わりにスタッフから給料が手渡される。これは男性の

家族があらかじめ月末に当事者に渡すようにスタッフに預けておいたお金である。このようにオアシスクラブのスタッフたちは「仕事に通っている」という認識を男性が持ち続けられるようにしていたという。この例では、以前まで仕事をしていた男性が、デイサービスに通う現状を受け入れやすくするため、家族とスタッフが協力して当事者の仕事を用意している。つまり、当事者が「する」状態から「ある」状態へ段階的に移るために、当事者の「する」ことを疑似的に作りだしている実践だと考える。

一方でつむぐ会はこのような文脈は見られない。1人の当事者の「したい」の声をきっかけに企画を実現させ、できることを実感できるような企画を行っている。できなくなることが増える中でも、まだできることはありそれを引き出していく。このようなことからつむぐ会は、当事者の「したい」ことを実現し、できることを引き出している実践だと考える。

このようなことから二つの実践は、認知症であることの肯定の仕方が異なっていると考ええる。オアシスクラブの実践例でも男性の「したい」こととして仕事を行っていると捉えれば二つの実践は共通する部分もあるかもしれない。ただ、つむぐ会の方が当事者のできることをより引き出していけるだろう。それは、1人の「したい」をみんなでする中で、家族や当事者自身が気付いていなかった「できること」を発見できる可能性があるためである。また、オアシスクラブのようなデイサービスでは、職員だけで安全な活動体制を整える必要があるため、「山に登りたい」といった声を実現することは一般的に難しいと考えられるためである。一方でつむぐ会では「応援団」というプロジェクトを通じて地域社会を巻き込み、さまざまな企画を実現している。一見困難に思える企画でさえも可能にするつむぐ会の取り組みは、当事者や家族のできることの可能性を大きく広げるものであるといえる。

第4節 結論

つむぐ会は認知症カフェの事例として、当事者、家族、そして社会にとって、どのような意義を持つのだろうか。

つむぐ会は、専門的なニーズを満たすことより、楽しい時間をすごすことに重点を置いている。それは、認知症当事者にとって「ある」ことのできる居場所となるだろう。さらに、当事者がしたいことができないという「思い」によりそうため、「したい」の声を拾い実現している。こういった意味で当事者のできることの可能性を広げる場でもあるといえる。

またつむぐ会は、家族も、何かを「する」ことを求められず、家族としての苦労を理解し合える場所である。そのため、家族にとっても「ある」ことのできる居場所となり得ると考える。また、当事者の行動の背景にある思いを知ること、家族は当事者によりそう新たな考え方に変わることができる場所でもあるといえる。

そして、社会にとってもつむぐ会は大きな意義を持つ。地域と協力しながら当事者の「したい」という声を実現する活動は、認知症当事者支援のモデルケースとして他地域や団体、個人にとって指標となるだろう。また、当事者の声を直接拾い上げることは、社会での認知

症への理解が深まり、認知症当事者がより生きやすい社会の実現に繋がることが期待される。

高齢化が進むにつれ、認知症に対する不安を抱える当事者やその家族は、今後さらに増加すると予想される。そのため、当事者や家族が安心してすごせる居場所をさらに増やしていくことが急務である。そして、当事者の「したい」の声を拾い実現できるような、当事者主体の居場所を充実させることも重要である。このような取り組みを実現するためには、行政と地域の企業・団体が一体となり、支援の体制を整えていくことが必要だろう。「つむぐ会」のような認知症カフェの取り組みが全国に広がれば、認知症当事者や家族が地域で安心して暮らせる社会の実現に繋がるのではないか。

参考文献

- ・井口高志，2020，『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか——ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探究——』，晃洋書房

参考資料 URL

- ・金沢認知症応援団，「『～したい』を応援したい金沢若年性認知症応援団」2019
(<http://kanazawa-ypad.jp/> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・厚生労働省，2020，「若年性認知症実態調査」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000706870.pdf> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・厚生労働省，2017，「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～）」
(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/kaitei_orangeplan.pdf 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・厚生労働省，2019，「よくわかる！地域が広がる認知症カフェ～地域性や人口規模の事例から～」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000523084.pdf> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・厚生労働省，2022，「都道府県別 認知症カフェの実施状況」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/001253589.pdf> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・若年性認知症の人と家族と寄り添いつむぐ会，2025，「若年性認知症の人と家族と寄り添いつむぐ会」
(<https://tsumugukai.wixsite.com/mysite-3> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・政府広報オンライン，2013，「知っておきたい認知症の基本」
(<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201308/1.html> 2025 年 1 月 5 日取得)
- ・内閣府，2016，「平成 28 年版高齢社会白書（概要版）（PDF 形式）」
(https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_2_3.html 2025 年 1 月 5 日取得)